氏　　名	WANG Xiaofeng（オウ　ショウフウ）		
学位の種類	博士（芸術）		
学位記番号	甲第81号		
学位授与日	令和2年3月23日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目	Archiving Katzumie Masaru -Theory-Based Digital Archive Design for the Katzumie Masaru Collection		
審査委員	主　査	教　授	久保田　晃弘
	副　査	准教授	中村　寛
	副　査	九州大学大学院芸術工学研究院 コンテンツ・クリエーティブデザイン部門　教授	伊原　久裕
	指導教員	准教授	佐賀　一郎

内容の要旨

本研究は、勝見勝のデザインのモチベーション、活動、哲学を深く掘り下げることによって、勝見勝コレクションのデジタル・アーカイヴを制作する理論的および実践的なメソッドを見出すことを目的としている。

勝見勝（1909-1983）は、日本初のデザイン評論家であり、日本の近代デザイン史において、幅広い分野のデザインに関する知識を広げた人物である。デザイン評論家として、勝見勝は執筆のみにとどまらず、日本の近代デザインの啓蒙のために、実際にいくつかのデザイン活動を通じて、彼のマインドを広げていった。例えば、1964年開催の東京オリンピックでは、デザイン・ポリシーのディレクターを務め、成功を収めた。第二次世界大戦後、70年以上かけて、日本人は社会を変化させ続けたデザインの力について学んできた。しかしながら、勝見勝は日本の近代デザインの啓蒙に携わってきた主要な人物であるにもかかわらず、今日に至るまで十分に研究され尽くしていない。

歴史を受け継いでいくメディアであるアーカイヴは、過去を振り返るものだけではない。デザイン活動の根拠を証明し、未来に向けて、現在を確かにするものである。勝見勝コレクションは、そういったアーカイヴ・コレクションである。グラフィックデザインの分野を持続的に発展させるため、多摩美術大学に残された勝見勝の遺産は、徹底的に研究される価値がある。勝見勝コレクションには、アーカイヴの素材が多数含まれているが、そのための研究体制はまだまったく組織されていない。そこで、本研究は、勝見勝コレクションのデータベースの構築に焦点を当てている。

本研究の特徴は、理論的研究と実践的研究が深く結びついていることである。まず、勝見勝自身の研究および、そこからアーカイヴのデザインを導くのが、理論的部分である。勝見勝コレクションと、その批評的アーカイヴを具体的にデザイン、制作（実装）するのが実践的部分である。さらに理論的部分、実践的部分は相互にフィードバックしていく。勝見勝のマインド

を受け継ぐ機能的なデータベースを構築するためには、日本の近代デザインを啓蒙しようとした勝見勝のモチベーションを深く掘り下げていくことが不可欠である。同じ理由で、本研究は、勝見勝コレクションのアーカイヴを解読するメソッドが、勝見勝の全体像を掴めるかどうかにかかっているという仮説を提示する。勝見勝の哲学は、彼の人柄とデザイン活動によって構成されているため、論理的研究パートは、勝見勝コレクションのアーカイヴの分析に関する知識を継続的に支えていくことになる。

本研究は、勝見勝に関するアーカイヴに基づいた初めての研究成果になるだけでなく、特定の人物のアーカイヴ・コレクションを構築するための、創造的かつ批判的な方法論を提供するという点においても、大きな意味を持っている。本研究は、アーカイヴデザインに新たな契機をもたらし、学生、教育者、研究者などのさまざまなアカデミックな背景を持った人々にとって、その教育的価値をサポートすることを目的としている。つまり本研究は、デザイナーたちに教育的・研究的用途におけるアーカイヴデザインについて、その意味をより深く考え、討論し、実践するよう促すものでもある。

審査結果の要旨

中国からの留学生である WANG Xiaofeng は、2018 年に設立された、多摩美術大学のアートアーカイヴセンターに収蔵されている、勝見勝コレクションのアーカイヴ化をテーマとした研究に取り組んだ。1909 年生まれ（1983 年没）の勝見勝は、昭和を代表する、そして日本のモダンデザインを切り開いたグラフィックデザイナーである。

デザイナーのアーカイヴというと、多くの人はそのデザイナーの作品のコレクションのことを想像するだろう。実際勝見も、東京オリンピックのデザイン専門委員会の委員長をはじめ、大阪万博、沖縄海洋博といった大きな国家イベントのためのデザイン計画に携わり、関連してその公共サインのための絵ことば（ピクトグラム）の制作も行った。しかし勝見は、そうした視覚表現を作り出すデザイナーというだけでなく、1928 年には日本デザイン学会を創立。1959 年には、季刊雑誌『グラフィックデザイン』を創刊し、その編集長を務めるなど、デザイン研究、評論活動を、多数の著作を通じて行った。さらに勝見は、この『グラフィックデザイン』誌をバイリンガルで編集するなど、日本のデザインの海外への紹介活動も熱心に行った。それだけでなく勝見は、1929 年の桑沢デザイン研究所の創設に参画し、1941 年には東京造形大学を創立するなど、次の世代を育成するためのデザイン教育にも尽力した。

こうした多様な、そして個人の創作のみならず、日本のデザイン界にとって極めて重要な役割を果たした勝見の活動をアーカイヴ化するとは、いったいどういうことなのだろうか。どういう意味があり、どういう方法で行えばいいのだろうか。それは、あるデザイナーのデザイン作品のアーカイヴではなく、デザイナー自身、デザイナーそのもののアーカイヴでなければならない。WANG Xiaofeng の研究は、デザインのアーカイヴではなく、デザイナーのアーカイヴをつくるにはどうしたらいいか、というアーカイヴィングにとって本質的な、そして極めて困難な問題に直面するところから始まった。

WANG はまず、多摩美術大学に残された膨大な勝見勝コレクションを、ひとつづつ箱を開けて確認し、分類整理しながらリストアップするという、アーカイヴ研究には必須の、しかし単調で膨大な作業を地道に行うことから出発した。その作業を通じて WANG が直接触れることとなったコレクションの一次資料は、WANG に多くのインスピレーションと思索を与えてくれた。

当たり前のことではあるが、デザインではなく、デザイナーのアーカイヴを制作するためには、まず対象とするデザイナーの人生の道のり、影響を受けた関心事やデザイン以外の活動の履歴、さまざまな友人やコミュニティーとのかかわりなどを、資料を通じて複合的に分析することで、勝見勝の人物像とその思想哲学を明らかにしなければならない。そのためには、勝見が日本の現代デザインの啓蒙期に、「何」を「いかにして」行ったかではなく、「なぜ」そのような活動を行ったのか、そしてその結果、日本のモダンデザインの思想が、その「なぜ」を通じていかにして相互作用的に形成されたのかを調べなければならない。それは（通常行われる）対象のアーカイブではなく、関係と文脈のアーカイヴというべきものになる。そうすることで、勝見とデザインの相互作用が、現代に至る社会にどのような影響を及ぼし続けているのか、という構造が明らかになっていくだろう。

論文は全体で５つの章から成る。まず第１章では、勝見アーカイヴを構築する上での基盤となる、勝見のデザイン哲学とその重要性を提示した。前述の勝見の経歴からもわかるように、日本のデザイン界において勝見の役割は極めて大きかった。その大きさを生み出したのは、勝見の作品の量ではなく、その哲学にあった。哲学は科学と同じく、積み重ねの学問である。いい方を変えれば、しっかりした哲学は時代を超えて生き残り、いつの時代の人にとっても欠かざるべきものとなる。勝見のデザイン哲学を今もう一度振り返り、その意味や意義を確認できるようにしておくことが、デザイナーのアーカイヴの核心にある。

哲学が積み重ねの学問であるとすれば、勝見の哲学の意味を深めていくためには、勝見の哲学を導いたもの、そのルーツを探らなければならない。論文の第２章では、勝見の生涯を辿る事で、何が勝見をデザイン批評家に導いたのかを考察した。WANG はそこに「登山家の経験」「雑誌への興味」「教育への関心」「時代の需要」という四つの要素があると考えた。勝見にとって、登山はデザイン以前からのものだった。といっても勝見にとっての登山はいわゆる登山家としてのものではなく、むしろハイカーのものだったといえるだろう。高い山にいち早く登り記録をつくることが目的なのではなく、同じ山を何度も登りながら、その登りかたを味わっていくハイカーのように。さらにそこで、第二次世界大戦という既成概念の転換が起こったとすれば、それらがすべて勝見のデザイン哲学を導く環境となったことは、（今振り返れば）至極当然のことだった。

デザイン哲学が純粋哲学と異なるのは、それが人や社会に対して機能することを求められることである。実際、勝見はさまざまな社会活動を通じて、自身の哲学を実践していった。論文の第３章では、そうした勝見が関与してきた社会活動、具体的には教育者、アートディレクター、雑誌編集者、そしてデザイン研究者としての活動を取り上げた。続く第４章では、それまで述べてきた勝見のデザイン哲学が、いかにして現代日本のデザインを啓蒙したかについて考察した。勝見のデザイン哲学が導いたのは、現代社会における「デザイン」とその方法論、そして「デザイナー」というデザイン方法論の実践者の再定義であった。その背景にあったのは、デザインによって、より良い生活環境を作り、より良い社会を構築するという、至極あたりまえのものである。しかしデザインにせよ、哲学にせよ、それは特権的なものや、限られたエリートや学者のためのものではない。勝見のデザインが今なお意味を持つのは、そうしたあたりまえのことを深く考え抜いたからに他ならない。

論文最後の第 5 章は、この論文のもうひとつのハイライトである。WANG はこうした勝見に対する研究とそこから得られた理解を、アーカイヴのインターフェイスというかたちで実装する。

本来アーカイヴとはニュートラルなものであるべきだが、WANG は自らが構築した勝見アーカイヴにおいて、タグによって勝見コレクションをニュートラルに検索できる（通常）のインターフェイスに加えて、自身の勝見研究を直接反映した、ダイナミック・インタフェイスをデザインした。それは第 4 章までに示した勝見の生涯、そしてデザイン思想と実践をダイアグラム化し、そのダイアグラムに沿って勝見コレクションにアプローチできるようにしたものである。こうしたアプローチは、従来のアーカイヴ研究からみれば、その枠組みを逸脱したものに見えるかもしれない。しかしこの論文で繰り返し WANG が述べてきたように、勝見のデザイン哲学が今なお必要なものであるとすれば、それを何とかして次の世代にも伝えていかなければならない。現代に残る仏像が、それを制作した人以上に、残そうとした人が何世代にも渡って続いたように、勝見のデザイン哲学を世代を超えて伝えるためのメディアとしてこのアーカイヴが機能することが、WANG の願いでもある。

デザイナーのアーカイヴは、単なる事実、具体的には作品や著作のコレクションを超えて、それらが生まれた文脈や背景も含むものにならなければいけない。それでは文脈や背景のアーカイヴとは一体何で、それをどのように構築すればいいのだろうか。本論文は、こうしたこれからのアート＆デザインアーカイヴが取り組まなければならない大きな問題に対して、勝見勝コレクションのアーカイヴ化をテーマに理論と実践の両方からアプローチした点で画期的なものであり、デザインではなくデザイナーのアーカイヴを構築する上での、先駆的な事例となった。以上のような観点を総合し、審査委員の総意として、本論文を学位を授与するに相当のものと認める。

（久保田　晃弘）